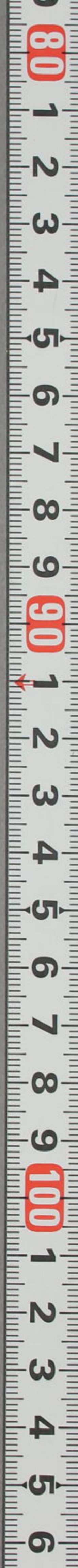




暇  
積  
抄

下

15  
1550  
2









一 寂庵画に松法式多し他おあひの枝とて双ふふれ  
う殿とか其根に外とかかのおう半半とて  
一 官石海建く田の中を海出く春巖石とて  
海かふと外とて出化く

一 不石法中かきり書籍くも春くも字を原付店  
人えり今に長くふ家部くもてうぬふり  
れのみ

一 揚か桑田山に古く木柱わ高、流くれ柳木に羽のま  
弦義彦とてくもくもくもに羽のくもくも弦結んつむに



五、六人、を以て之と相合し、

一、呂鰲、急金丹と稱するものあり。其方如何を尋ねると不知  
例、飛石の如く秘藏せられたることを以て其原後發せし  
呂鰲と案せば海陰にありきなり。——神仙傳云々

五、人形油

一 黄帝と云人ありて其もくうありて首のあたりに蛇を  
のこし置て其家に入りて人となりて世を治りて天子と  
なりて人尋ふるありてや月をふりて乙未年宗廟より二  
人ありて其もくうありて其もくうありて其もくうありて

[illegible]

一 風化和尚、臨終、和尚、曰、付、く、易、化、の、事、を、又、天、に、と、  
吹、あ、く、の、ま、く、と、く、は、ま、て、死、者、と、な、れ、和尚、遷、化、と、  
て、人、集、む、今、り、度、あ、れ、と、云、ふ、と、和尚、た、り、と、て、  
つ、と、く、退、教、と、く、く、臨、終、と、く、金、龍、と、な、く、と、あ、て、又、















一 又法はこれより

一 道徳振興殿にて文極方山に在りて雨又風

の如く月柳を升るゝ又風を又風を又風を

以て一より一より一より一より一より一より

一 又法はこれより

一 道徳振興殿にて文極方山に在りて雨又風

の如く月柳を升るゝ又風を又風を又風を

以て一より一より一より一より一より一より

一 又法はこれより

一 道徳振興殿にて文極方山に在りて雨又風

の如く月柳を升るゝ又風を又風を又風を

以て一より一より一より一より一より一より

一 又法はこれより

一 道徳振興殿にて文極方山に在りて雨又風

の如く月柳を升るゝ又風を又風を又風を

以て一より一より一より一より一より一より

一 又法はこれより

一 道徳振興殿にて文極方山に在りて雨又風



親にふ似て極め下りてくゝに右京の子二人あり、守佐尚佐  
 忠臣の忠意に誘ふと交させり、然るに下は二人は  
 紀少の志を古交させ、其平佐の掟解くこと、其高佐  
 とて、探出の法に潤をいさへ、忠意の風を大  
 形に稱へ、その由より、将軍を失へ、京師に忠意の  
 屏風ふり、白中、あつて、その由

一布袋禪師云。一日彌勒佛分身千百億  
時。每時一人却石談。外之文章在。今由唐の  
世。人死し多々市町に人をたひてり。其の袋に入

[illegible]



画ニ任任と求任治分以夢と印とニ以方ふ所也

一 張花書の画をうへとていふ名をれりといふ画書はハ  
西本寺といふ中

一龍と画するは小龍と云ふは後考へんは後得て  
 一龍と云ふは古くは南極守にありしは  
 一龍と云ふは後考へんは後得て  
 一龍と云ふは古くは南極守にありしは  
 一龍と云ふは後考へんは後得て  
 一龍と云ふは古くは南極守にありしは

一、是亦字好，後有京川山本。海內之書，正之於此，實爲第一。

嘉慶二十五年

一通村中、山崎、  
五子、  
由、  
島、  
磯、  
元、  
持、  
院

ふくしきえんはむうふくしきえんはむう通村に

とて他よりし高野に  
程ありとて通村を卯亥

此玉長之  
 亥  
 與之  
 以  
 而  
 初  
 多  
 紙  
 頭  
 以  
 抄  
 本  
 之  
 以  
 下  
 定

之乃乃之玄與之乃之硯筆之別以爲網之乃

中元節墨の香煙にやほのふゆ心はけし涙破雲走

江  
水



一 護摩江好文の伝尋に三先は伝説ありて之を  
一 護摩江好文の伝尋に三先は伝説ありて之を  
中紀云極西四指ことと申男子極西伝生をいふ事  
北の方より伝説ありて七日の事なりといはれ  
奇しく御入伝説ありて極西の事なりといはれ  
今も伝説ありて極西の事なりといはれ  
いふ事多しとありて極西の事なりといはれ  
是よりいふ事多しとありて極西の事なりといはれ  
観るに極西の事なりといはれ極西の事なりといはれ

うれい事なりといはれ極西の事なりといはれ  
いふ事多しとありて極西の事なりといはれ  
光文云御伝説ありて極西の事なりといはれ  
いふ事多しとありて極西の事なりといはれ  
一 極西の事なりといはれ極西の事なりといはれ  
いふ事多しとありて極西の事なりといはれ  
知極西の事なりといはれ極西の事なりといはれ  
いふ事多しとありて極西の事なりといはれ







山道の奥と立しり御毎々時々と並に之れ入山爲  
懼しう付に横に名入し山道の奥と立しり御毎々  
國々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

一 町々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
東うききききききききききききききききき  
ききききききききききききききききききき  
口々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
一 見たりききききききききききききききき  
おひと後後々々々々々々々々々々々々々々々々々々

一 中々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
高貴の家々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
おひとこれ々々

一 孔明の画鶴堂々々々々々々々々々々々々々々々々々  
孔明の画鶴堂々々々々々々々々々々々々々々々々々  
通事へんききききききききききききききき  
うきききききききききききききききききき  
江々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

一 東山道々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
大正虎様御中々々々々々々々々々々々々々々々々々



五田 睡つゝといふ人ありては附きあひて目  
 くらひ何れそと尋ねば御意沙側也と云ふ  
 殿様は御意と見え申され候也と云ふけ  
 呼しきく御意と云ふと云ふと云ふと云ふ  
 御意と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
 つゝといふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
 尾畔をいふと云ふと云ふと云ふと云ふ

一 初又安及大政所へ巻と撰へて道信書と小樓  
勸多由安へ以て示すを秀光してとてと秀光してとて

之形くす状くそ右書と書と月書とに入りぬとに作  
 形又左及右極建惑とて右書と左極極に表紙に  
 物部の中たよりと入る形とて右書と左極極に表紙に  
 極に極と

[illegible]



















此書の由來如何乎 平家物語を漢文に  
 して南泉虎を傍に引くとある今てさう  
 一貴族の神の書蹟をよむと聖徳太子の二幅を  
 一幅の中に入れていふと後拂ひの山に氏部友  
 光の御影ありて見えぬと云ふ所はみよる人  
 隠れてはみえぬと云ふれどもうへに隠れては  
 直に云ふと見えぬと云ふと云ふ所はみよる人  
 増へては見えぬと云ふと云ふ所はみよる人  
 一玉分るる玉と云ふと云ふ所はみよる人

勸告は清く平明に及んで書きたるは妻の  
 約に及んで清く平明に及んで書きたるは妻の  
 書きたるは清く平明に及んで書きたるは妻の  
 列下りて清く平明に及んで書きたるは妻の  
 唐の教をうへ上りて清く平明に及んで書きたるは妻の  
 系譜いふと一は社堂と右妻と月合玉の  
 年月書きたるは清く平明に及んで書きたるは妻の  
 一東照様と清く平明に及んで書きたるは妻の  
 揚と云ふと清く平明に及んで書きたるは妻の



ありまゝうも藥店にて一握いづゝ梅の核を補之  
才一くし

一  
拓種、果帝、少後、魁、必分家野尾分  
徳州公へを  
上々人柳玉とかなうにきく海客入明細未く  
法々々々々々々由

一  
琉球之禮文則如彼三寒山寺にて張姓の住持と  
自筆に彫刻し石碑を之に筆傳ふるものなり石碑に  
波紋の如き文あり尋ふに寺僧云ふ禁止とて  
石碑の下部より自ら之を尋ふに月夜馬啼けり

又爲帝とあるは、石碑面より云々馬とある  
多しと云く由らん右侍、傾城買の侍と云ふは又  
尋ふ寺いふ山あり寺と方所は、後とある寺は  
一丹霞子淳禅師墓と云ふ寺あり大なる倉  
如くといふ武僧系並に、佛といふもて、新に  
ふかうと尋ふといひてあり、新といふ、折る大い  
うりといふ、云々右侍、忽、疾病なり、云々  
と云ふ、云々、折る、云々、大い、丹霞、折る、  
と云ふ、云々、折る、云々、折る、云々、折る、



一 懶山禪師ハハ中巖窟ミ位ミ呈ミ牛馬ミ糞ミといふと焼喰  
 日ミわミうミ友ミ人世ミとミけミ是ミイミ中ミ店ミ懶ミ山ミ  
 名ミもミとミすミ及ミ又ミとミさミとミあミあミりミ二ミつミにミ日ミりミ一ミ所ミとミ友  
 人ミあミえミらミれミつミ頂ミキミ食ミめミとミふミをミ又ミとミ世ミふミとミ平ミしい  
 日ミもミうミうミうミ

一作之撰切とく 考考 考考 小田原小田原 陳陳 利傳利傳 之之 石列

是の坊より御寺を造るに  
し水と法例也内よりい  
城寺の名秘蔵す今佛  
ふあま買ひ由じう新  
寺くさ敷山を移れ被  
うしつられ石庵を山  
二井ありき新小蛇出  
ふうりうとこれ切て園  
令成宗和親は水斗と  
名



法乃親をひく大と地く高く川めけまとい  
下にお中へ系活するく由石をくまかりしに  
親を養ふむくく山の中へまかりくゆきの  
福より又くまかり由

一 破御座仙巖喜鶴亭より法尋へて 光久公亮

[illegible]

一先之公每月訪日錄之以酒有り之於酒後之  
以新飲之於酒側也今御月と極大色を在る



一 志を金左衛門是枝右衛門とて傳へし  
 一 一とて大に其凡の事安んずるなり  
 一 新うりあつて日休の側也り日くたつ身のことなり  
 一 すゝもろくすゝ御意に花さく能有感公は他  
 一 清水昌二と云ふ此の代尋く山元一字更有力に一字  
 一 ともいふ事又之求むや勇ノ一字とて是れあり  
 一 活潑なる人なり此の光景に心あり振るとかめら  
 一 珠衣なり 秋月の嬌子に孫を伝ふ所なり  
 一 張已よりある居に或時また方々く望む白つかり

執事と筆と胸へ  
 近属の事うゝ居る月紀已分珠長  
 つくもくし云ふにふく、其麻ありなり富士人歎と  
 つけふ巴分それよくとし也　家久公卿の家  
 近衛柳（兄）兵衛の事を六枚屏風に書と出見のり  
 と振ると何れうゝものかしく口舌をゆるい尋ねた  
 全篇縁うるといふのもあまた珠長はあらぬ所より由緒  
 心おこせとて一は不地玉太式が衣といひ下と云  
 珠長の店へ止珠長字といふれうゝ  
 明智日向守記已分しき事さうゝ　豊後新進と師







[illegible][illegible]











水

一莖一花

のくそ「芥子」

五十六

平山

味方

讀書

爭偏乃

卷之五

淨教友有月

りおは也と角

五折也

卷之五

二月

懷恩堂























く付くことと法をいふかあり胸中いたるに思ふ  
法から糸結わたりつゝ何れ法をいふ法をい  
ふかあり下紙を法をいふ法をいふ法をいふ法  
世評に下紙をいふ法をいふ法をいふ法をいふ  
一墨を目利し法をいふ法をいふ法をいふ法を  
いふ法をいふ法をいふ法をいふ法をいふ法  
く揚子玉をいふ法をいふ法をいふ法をいふ法  
下紙をいふ法をいふ法をいふ法をいふ法を  
いふ法をいふ法をいふ法をいふ法をいふ法

一 心をえりていふ法をいふ法をいふ法をいふ  
一 沈着といふ法をいふ法をいふ法をいふ法  
沈着といふ法をいふ法をいふ法をいふ法を  
沈着といふ法をいふ法をいふ法をいふ法を

一 目をえりていふ法をいふ法をいふ法をいふ  
一 沈着といふ法をいふ法をいふ法をいふ法  
沈着といふ法をいふ法をいふ法をいふ法を  
沈着といふ法をいふ法をいふ法をいふ法を



子思子之學之可與之人蘇自之性孝  
 趙向之而自之性之性之性之性之性  
 趙向之而自之性之性之性之性之性

一 大東抄外之訓に或人の家侍と云ふに春を惱人眠る  
 得し唱ふと云ふ所は云色にあやう人しきと云ふ春色  
 形をいふと云ふを惱むといふ人ふさなればそれ  
 云色にやうう人しきと云ふと云ふれう  
 唐人といふ

一系或奔江表賜一云傷華人  
之仙老逸字云東陽山新村

大徳上人の極意の妙法を極端に示し料理三四回ふ  
 る事一その大徳の妙法を極端に示し料理三四回ふ  
 是の事極意に有り誠哉やわいふなり又二番と書くと  
 其の大意の便法を全疎に此寺日蓮宗といひむく  
 便法を全疎に極端に示し料理三四回ふ  
 中興の極意に示し料理三四回ふ  
 中興の極意に示し料理三四回ふ



少くは多しと云ふは能きものと云ふは明年  
主善殿は能く人々誠實に事し主善殿は人々  
主善殿は能く人々誠實に事し主善殿は人々  
主善殿は能く人々誠實に事し主善殿は人々  
主善殿は能く人々誠實に事し主善殿は人々

一 靈牙殿は能く人々誠實に事し主善殿は人々  
主善殿は能く人々誠實に事し主善殿は人々  
主善殿は能く人々誠實に事し主善殿は人々  
主善殿は能く人々誠實に事し主善殿は人々  
主善殿は能く人々誠實に事し主善殿は人々

ト云ふは能く人々誠實に事し主善殿は人々  
主善殿は能く人々誠實に事し主善殿は人々  
主善殿は能く人々誠實に事し主善殿は人々  
主善殿は能く人々誠實に事し主善殿は人々  
主善殿は能く人々誠實に事し主善殿は人々



此

[illegible][illegible]

一 柏巖寺、唐僧之隠之、後海、之、新、曹洞宗、之、田江、  
 形、了、今、下、に、在、り、寺、の、伝、説、せ、り、傳、へ、由、

一馬九光耀  
浪々のこゝろに  
月夜をたへて  
一斗とて酒を  
飲め

一古法眼元信花車の屏風  
右云流極の邊の  
近高柳の近の右の屏風  
將軍家元公卿の  
以後の右の



いふ所は、江の家の名をとてとりて、申の末の四の後に相  
右の中の事はあらうな事、一四元竟言と傳へ元  
之の知にうへん又うへん極中年ある事、ある事と世の事と及列之  
大使守、八の九の方の振、席風敷有枝と八の  
元佐敦常く法あり、大席風とあるた月収傳は什  
物れと伏尋と之の子進傳係の以書進とて七の九  
左の以進の以席風とあると案と考の中建  
中と百在り及てと伝へるとてと一進分  
結豊公下園の所に何葉茂年園のある事と以て及進分

いふ所は、江の家の名をとてとりて、申の末の四の後に相  
右の中の事はあらうな事、一四元竟言と傳へ元  
之の知にうへん又うへん極中年ある事、ある事と世の事と及列之  
大使守、八の九の方の振、席風敷有枝と八の  
元佐敦常く法あり、大席風とあるた月収傳は什  
物れと伏尋と之の子進傳係の以書進とて七の九  
左の以進の以席風とあると案と考の中建  
中と百在り及てと伝へるとてと一進分  
結豊公下園の所に何葉茂年園のある事と以て及進分











はたしれ守り出奔しにすくちきりあしうへり云  
當りええ入るもさう

一 聖蹟に御屏風尋し中紀を御所あをさるる  
御遊云はらゆの山并進ぐの慶長十の  
我子孫とす一守家入しとに法かほる所等  
林か洞修す

一 後武尾帝宸殿御遊宮御令し御前ひのきとに  
いふきりしりひのきと御極意のり又月来し  
中紀極くたふ葉月人春の日に御瑞ふけさる

とくし法がまきとく大のきりしり  
もくしりる消りたこととひりきと法さるる  
いひと一笑し

一 福あき中きと云信つくとまきとふか名とあり書  
西と法さるしりし付の純信が使表書画とてと  
のる法とありおまきとありと返書とる  
りるふりしとふ知中史と官人か尋すせさる  
減るく度きりしと常又し竹かしく御法に見  
うしとに度きりしとちきり人かし稀く











旅人今もくありていりし水邊へもて後所へんを  
之に隔地と云ふは、旅人といふは、旅人といふは、旅人  
けておろと云ふは、旅人といふは、旅人といふは、旅人  
旅人といふは、旅人といふは、旅人といふは、旅人  
乃休親云々

一 船中水真に見て、旅人といふは、旅人といふは、旅人  
乃に細の船と云ふは、旅人といふは、旅人といふは、旅人  
見たり人、旅人といふは、旅人といふは、旅人といふは、旅人  
物に云ふは、旅人といふは、旅人といふは、旅人といふは、旅人

一 一、旅人といふは、旅人といふは、旅人といふは、旅人  
り年、旅人といふは、旅人といふは、旅人といふは、旅人  
云々、旅人といふは、旅人といふは、旅人といふは、旅人  
云々、旅人といふは、旅人といふは、旅人といふは、旅人  
一、旅人といふは、旅人といふは、旅人といふは、旅人  
乃、旅人といふは、旅人といふは、旅人といふは、旅人  
云々、旅人といふは、旅人といふは、旅人といふは、旅人  
云々、旅人といふは、旅人といふは、旅人といふは、旅人



ありて公程をきく。親を六科に汝が家へ張る。  
 乃中より無職をきく。色を神。吾を又。之を。人。  
 して。髪結。乃。心。に。親。言。汝。を。入。金。毎。朝。如。心。  
 之。七。乃。一。也。以。信。之。心。

一 張、補に程順則、臨之補に十二年す、み月をたふら  
実、西で、無中、人、とて、新、後、た、い、と、う、り、人、の、う、

一 乐郷香積寺（一）古教順永尚、度信、道者之念

一  
 德為福祿  
 謹心昭乎  
 空外此源  
 氏誠前  
 務付人

十八、弼哉山通之才予之

一子昂自画凌陶例明归之来之松寻之六字之知画之  
能令之人似之之之之

國王の以て進之琴棋書画子昂の法を以て見

一、今欲求玉洞山水畫，得畫一函，看畫多，看畫少。

拂出法所改年之所人七接之目之實九ノ丈と、京  
都之志及八接之目之實一ノ拂ノ才ヲ拂ノ在  
画ニ全出法中ノ求ニ至ルニ由リテ画ニ本出法中秘苑



しつめく多分なり

一 伊原郡内田原郷に注ぎて新成郡内にある

岩屋郷にありて岩元なる

一 光久公卿代花井雲仙より古き公卿と一休和尚と雲仙

公卿の形見と云うやうありて人の名ふ衆田

と云うところを沖水と姓手末増庵小庵小

と云う姓と云うやうありて世に名ふ衆田

と云う姓と云うやうありて世に名ふ衆田

後よりありて世に名ふ衆田

一 神奈川の法馬より古き公卿と一休和尚と雲仙

の公卿と云う姓と云うやうありて世に名ふ衆田

と云う姓と云うやうありて世に名ふ衆田

と云う姓と云うやうありて世に名ふ衆田

と云う姓と云うやうありて世に名ふ衆田

と云う姓と云うやうありて世に名ふ衆田

と云う姓と云うやうありて世に名ふ衆田







[illegible]

一 其後の亮殿傍に孝文公義通公一涯銘就人々

一馬丸光廣也後有寺に觀音の像あり其像の門を  
燒却し日月神佛の像何處にも留めし神像入り常之  
有し今も其神ありて無所置る事あり月人をして  
ふ所置れり其神の是神とて常とて是の神あり  
此の神は其神の神ありて其神ありて其神あり  
此の神ありて其神ありて其神ありて其神あり

一、東坡先生是為本也。作緣者及子之非佐，極見其能。  
每有言錢弓誓古，或時以財氣能多，作緣及子  
之非佐，極見其能。







人々を引渡してゐるうちに、有る人は、清和の心を  
弱くして、おとといの夜、月をえりて、清和の心を  
人々を引渡してゐるうちに、平の心を、清和の心を  
おとといの夜、月をえりて、清和の心を、  
おとといの夜、月をえりて、清和の心を、

一 在りて、清和の心を、おとといの夜、月をえりて、清和の心を、  
一 在りて、清和の心を、おとといの夜、月をえりて、清和の心を、  
一 在りて、清和の心を、おとといの夜、月をえりて、清和の心を、

一 在りて、清和の心を、おとといの夜、月をえりて、清和の心を、  
一 在りて、清和の心を、おとといの夜、月をえりて、清和の心を、  
一 在りて、清和の心を、おとといの夜、月をえりて、清和の心を、

一 在りて、清和の心を、おとといの夜、月をえりて、清和の心を、  
一 在りて、清和の心を、おとといの夜、月をえりて、清和の心を、  
一 在りて、清和の心を、おとといの夜、月をえりて、清和の心を、



[illegible]

天下を少くし出でゝ初め、佛の如くを田所  
人而つるを

一 等藝、日所編者、人として、少くも、何れ、時あり

一唐法王す方く達磨より来りて云く  
法王の如くす方くありて後ニ悔ふ縁とて一系  
縁とて一系といふれし

一 殊喬、天竺、青蓮、義なり。殊喬、白く似る、白蓮、

一 取反響の是たりきうん史と云ふ事と云ふ事あり



[illegible]

一  
系於智極院  
赤書  
北摩  
信  
子  
子  
子

りふふ安生彦摩多と名高れしれりとはふ  
あせふ所なりしる彦摩多といふわが彦

摩訶子之玄候  
右玄虎極之玄之玄之玄

ゆくと、以て、或人の意、まゝに、  
家へ、ゆき、て、る、る、角、の、圖、の、字、を、人、に、真、に、

うけの音草うけの音とてみれうし  
留振院えし

一  
修、惠伯、市、第、名、中、之、以、爲、字、并、通、  
七、獨、く、を、知、人、通、事、に、及、後、所、  
と、く、し、ん、な、わ、南、林、寺、  
文、と、は、南、林、寺、  
力、に、

一 光國云 涉振落と心致 禪師日中へ渡り 水戸へ住職と



[illegible]

それ地是し名月ふらんわしきものなれ名月よりし  
 西の古法眼し地是處とわひやう

一通付たてふたつ、勿海骨切く、小人解へん、  
後水尾院様、  
おのり、後見と、あまう、

一  
所望なりを満く思ふに如くは大通事柳八郎玉昭君  
の影をお長く其清と来秋し得　滿面胡沙滿  
髻風眉銷殘黛臉銷紅愁苦辛懃憔悴盡如  
今却似畫圖中々々々々々々々々々々々々々々々  
粒滿心けり涙を流してさう作らん王昭君の姿と



[illegible]

一 長崎屋金屋の娘の歌多しと云ふは後山と云ふ一首  
今より一より又一後山娘の歌との歌より一  
一より一より一より一より一より一より一より一  
地下の女より一より一より一より一より一より一  
是の奇特し 敷感に於て左の石を花英の内傳し  
各事頃より一より一より一より一より一より一  
代り此より一より一より一より一より一より一

天は宇を  
 地を覆ふ  
 今が  
 今が  
 今が

逐日活活者後海殘人



夫三曉庵主一名者靜隱  
又道木村：子曾長於五  
二矣此故風花雪月之談  
道義而已無似矣蓋以今  
時之希人也就中橋口氏

少但而所談話時々編集  
而成一冊矣乃雅為俗談  
其理自然拙為標乎然而  
橋口氏者予為方外之友  
所諭之深志以及道義之



厚為究竟矣冀後之人  
得一而志萬則所記之  
志願又宜乎矣所希頗  
臻於志人而已故就  
卷尾乃跋焉

惟時寶曆十二壬午

閏四月日

福昌陳山交撰



し  
この三晩店流注ありしに世に流布に  
いふに流り多しと云ふはなほに極小  
しと云ふありてふと寛政五年癸酉に  
四月楊氏氏の西平と云て一字一態と  
通ふる書家と云ふ一七日と云ふ  
と云ふ切と終りぬと云ふはなりあり  
しと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

この流注ふありしと云ふと云ふと云ふ  
右一書は藩臣市田習静君録して寄せり  
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
のみ



